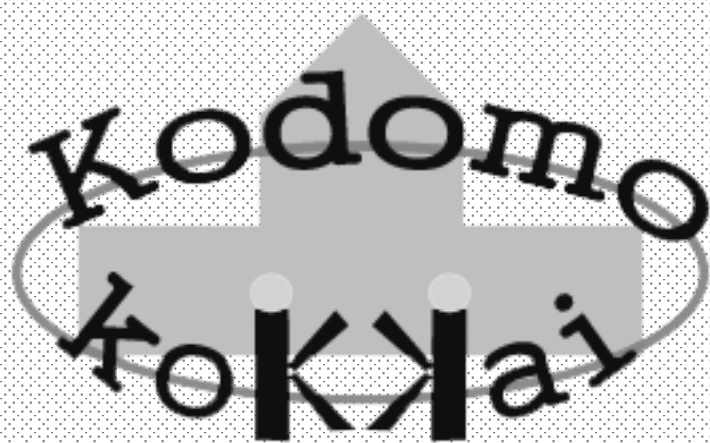


第16回 子ども国会 宣言書



子どもへこれからの社会と
向き合うきっかけを提供する

令和元年8月18・19日
子ども議員一同

【 分科会一覧 】

- **価格競争と労働問題** P 3.
- **自分の会社を考えよう** P 7.
- **スマホ依存症** P 10.

価格競争と労働問題分科会

参加者名： 白井瑛子、橋本樹、本間雅恵、猪股詩織、河野美羽、小作龍平

☆議論の流れ

価格競争とは

…商品やサービスの販売において、価格を主たる手段として各企業が相互に競争すること。

*イメージ出し

…安価、品質低下、安さ勝負、物にあまり差がない、プラス α の物で勝負、牛丼、ケータイ三社

◎なぜ価格競争は起きるのか

・消費者は安い商品を求め、生産者は他社より利益を求めるから。

利益を上げるためには？

- ・値上げ
- ・コストカット（人件費、雇用数、材料費）
- ・インスタ映え
- ・新商品開発
- ・地産地消

◎利益を上げるための取り組みで発生する問題について考える。

- ・日本における非正規雇用問題
- ・やりがい搾取の正当化
- ・外国人技能実習生

◎非正規雇用問題について深く考える

*ブラックバイトの定義について

- ・労働基準法、就業規則に違反しているもの

→労働条件無視

- ・労働安全衛生法第3章13条の3に違反しているもの

→体調不良の無視

*対応策について考える

- ・法も存在し、厚労省も労働者や学生に対してセミナー等も実施している

無知なゆえに違反だと分からないため、申請できない。

また、申請方法が複雑で理解が容易でない、最終判断が人であるために明確化されていない。

◎対策があるということを労働者や学生が認知するためには

- ・早いうちからの研修

→厚労省で行われているセミナー支援を学校などで活用する。

- ・メディア体験や疑似体験を行う

→研修を受けた学生団体が活動を行ったりする

- ・第三者の仲介機関を利用する

→労働基準監督官の有効活用

◎根底にある会社の経営難について考える

…価格競争によるものが原因として上がる

人件費、雇用数を減らす以外の対策

- ・機械化、AIの導入

→労働者は技術者となることで雇用数は減らない

→外国人労働者にも適応できる

- ・広告サービスの向上

→InstagramやLINE@などを活用する（飲食店など）

→チラシやセール情報などをHPに記載（スーパーなど）

◎価格競争から抜け出す方法を考える

- ・品質向上

→ブランド化

- ・土地のニーズに合わせた展開

→地産地消などで第一産業の活性化も

- ・購買意欲の向上

→質の向上、健康面への意識 etc.

☆子ども議員の提言

政府の行う労働問題対策について

- 1・現在存在している省庁の対応策に対する認知度を高める
 - ・労基法等に関するセミナー…メディアによる広報・疑似体験会等の実施
 - ・公共の場におけるポスターの掲示・SNS等を活用した広報活動
- 2・飲食店を中心に職場環境についての抜き打ち調査

人件費をカットする以外の解決案として

- 1・機械化・AIの導入
労働者から技術者への転身することにより、雇用枠減少を防ぐ。かつ、外国人技能実習制度にも適応可能
- 2・広告サービスの向上…SNS(Instagram、LINE@、Twitter、Facebook、YouTube等)の積極的活用

根本的に価格競争から抜け出すために

- 1・物品の品質向上…商品のブランド化(例：7プレミアム)
- 2・その土地のニーズごとに合わせた商品展開

・購買意欲の向上

…価格競争には限界があるため、質や健康面、風土等、それぞれのニーズに合わせた商品の提供

☆子ども議員の声

やたらに疑問に思うことが全て既出の事実であることにおおいに驚愕すると共に、ここまで世間に知られていないことにも疑問符頻発。中々人は、自分を含めて無知であることをいたく痛感できました。しかし、だからこそ楽しい討論だったと思います。

(小作龍平)

1つの議題に対して深く議論出来たことで充実した時間を過ごせたように思います。今回の議題は今後自分が生活して行く中で関わるものなので、今回議論出来たことは有り難いことでした。そして自分の今後に関してもっと知ることに貪欲でいようと思いました。参加を進めてくれた友達に感謝しようと思います。そしてまた参加出来たらなと強く思います。

(河野美羽)

終始すごく良い雰囲気でした。これがきっかけになってこの議題についての話が身近になっていたら大きな意味があったと思います。この分科会に入ってくれた方たちを含めてイベントに参加してくれた皆さんに楽しんでいただけたら大満足です。

(白井瑛子)

子ども国会は今回が初参加でした。今まで議論したことは何度もありましたが、こんなに長い時間議論することはなかったので、最初はとても不安でした。しかし、時間をかけられるからこそ内容にとっても深みが出たと思います。議論の中で、利益の上げ方について話し合いましたが、実際に将来働くときにも役立つのではないかなと思うほど有意義な時間を過ごせました。ありがとうございました。

(猪股詩織)

労働という身近な話題でありながら、今まで自分たちの守られている権利について考えた事なかったので、すいい機会になった。法整備はかなり整っているにも関わらず、認知されていない現実があるという課題を発見することができたので、今後もししたら改善できるか考えていきたいと思った。

(本間雅恵)

価格競争、それによって引き起こされる労働者へのしわ寄せ。いずれも私たち学生のような立場の弱いものからすれば切実な問題であり、自衛のため将来のために知る機会を得ることができたのは得難い体験だったと思う。考え、知ることでできた貴重な二日間だった。

(橋本樹)

自分の会社を考えよう分科会

参加者名： 井村大希、古家凌雅、武藤実緒、桑田実結、

佐川夏美、八瀬航太郎

* 起業とは何か イメージ出し

「起業」という言葉を聞いて思いついたイメージを元に、そもそも起業とは何か、その意義について考えた。

→新しいアイデアが必要なイメージが強いが、既存のものの掛け合わせでも起業できる。また、デスクワークでもできる起業もあり、政府も経済が活性化のために推進している。しかし、失敗した際に再チャレンジするための環境が整っていない。

* 日本の起業の現状

日本の開業率の目標10% に対し現状は5.2% (中小企業白書)

<理由>

- ①起業した場合、生活が不安定になることへの不安: 36.9%
- ②起業に失敗した際のセーフティネットが整備されていない: 33.8%
- ③金銭的コストが高い: 30.8%

* 起業する上での弊害

現状から考えられる起業する際の弊害を挙げ、それらを解消していくための方法を提言にまとめた。議論の中で挙げた起業する際の弊害は以下の通りである。

- ・ 人脈がない
- ・ 困った際に誰に相談すれば良いかわからない
- ・ 失敗した時のセーフティネットが整備されていない
- ・ 起業してみようという発想をすること自体がない

☆子ども議員の提言

①文部科学省、②経済産業省、③日本中小企業団体連盟

様へ

①中学校での講演

目的：起業という選択肢について早い段階で知ってもらう

対象：中学生（1,2年）

回数：一年に1回ずつ、計2回

形式：起業家を呼び、会社立ち上げにフォーカスした講演を行なってもらう

②助成金制度

目的：生活が不安定な時期に助成金を得ることで起業へのハードルを下げる

【海外の例】

フランス(2009)「個人事業者制度」:

失業者が個人事業者制度を利用して起業をした場合失業給付を継続して支給する

ドイツ「起業助成金制度」:

起業開始直後の数か月間の生活費がカバーされる

6ヶ月は失業手当手取り月収の67パーセント、その後9ヶ月は5万程度、その間の収入制限はない、返済義務なし

条件・・・失業保険を払っていた、実現可能なビジネスモデルを提示すること

現在日本にある助成金制度は認知度が低く、かつ上述したような起業に失敗したのちに再起するための援助制度でないものが多い。そのため、再スタートのための助成金制度を日本も導入すべきであると考えます。

これを導入することで、起業における不安の軽減、起業家の増加に繋がり、日本経済の更なる活性化が見込めると考えた。

③スタートアッププラットフォーム

目的：起業家同士のつながりを深める、安定した起業を行えるようにする

モデル：The Family

内容：クラウドサービスの無償利用、失敗談・経験談の共有、スタートアップ向けの講座、失敗した場合の他スタートアップへの斡旋、助成金などの情報共有

参加条件：自企業の株価の5パーセントを譲渡すること

☆子ども議員の声

初めての参加で最初は緊張していましたが、議論が進むにつれその中に入り込んでいくことができ一人では調べないような起業についての情報も知ることができ、企業により興味が湧きました。また、年齢の近い起業に興味のある人と会えることはなかなかないので良い経験になりました。

(古家 凌雅)

起業とは何なのか、起業をする意義というのを議論したのち、中小企業における日本の制度を見直しました。この制度を見ていく中で、新たな事業を始めることに関する制度が若干海外に比べ遅れている気がしました。今回の宣言書で提言した内容のような制度に変化し、より日本の経済が活性化されれば良いと思います。

(井村 大希)

今回は自分の会社を考えよう分科会に参加しました。私は起業しようとは考えたことがなかったので周りの人の意見がとても刺激的でした。今まで起業について考えることがあまりありませんでしたが、起業も一つの選択肢として存在することを意識できました。一つの議題に対して話し合い、自分とは違う視点からも意見を聞いたことはよい経験でした。ありがとうございました。

(佐川 夏美)

議論していく中で、海外との起業に対する認識の差を感じました。日本も制度を見直すことで常識にとらわれず新しいアイデアを実現できる人が増え、社会の成長につながると思います。

(武藤 美緒)

今回子ども国会に実行委員として初参加させて頂いて、一日目のみ参加でしたが、委員の裏で動く仕事の多さに見ていて驚きました。けど、とても濃密な議論が出来て楽しかったです。

(八櫛 航太郎)

起業について考えていくと、それに付随して他の様々な問題解決につながることもありそうと感じるタイミングが多くありました。だからこそ起業自体に向けてのアプローチを考えることは新鮮で、久しぶりに長い議論時間の中でじっくり話ができ改めてよかったと思いました。ありがとうございました。

(桑田 実結)

スマホ依存症分科会

参加者名： 山下暁大、真野詞葉、西條正寛、田附優、高橋美樹、石田庸

☆議論の流れ

1. スマホとスマホ依存症

スマホ依存症の定義

明確な定義がないため、個人の認識により変わってしまう。

共通認識として、「ずっといじっていて、生活の中心になってしまう。」ということがある。

スマホ依存症の特徴

授業中でも使用してしまう。あつたら無意識に触ってしまう。気づいたら時間が経ってしまう。

スマホを使う目的（スマホ使用に対する理解）

娯楽（音楽、ゲーム、SNS等）、便利ツール（地図、時計、電子マネー）の二つが主な使用目的。

スマホの利用自体は悪いことなのだろうか？

スマホの使用により時短や効率化をはかることができ、スマホの利用自体は悪いことではなく、利用により支障をきたしてしまうことが悪い

中高生にとってのスマホの理想的な使い方

ツールとしての利用だけにして、必要最低限のみの使用が理想形。

しかし、ツールだけの使用などは厳しい。

なのでツール以外の使用も良いが、ツール以外を使用する際に、自制の効いている状態であるべき。

なぜ自制が効かないのだろうか

ただただ楽しいから

現実逃避や趣味に没頭してしまう。

2. スマホ依存症は直すべきものなのか

スマホ依存になる理由とは

ほかにやることがない、やらなければいけないことのために使っている。

一度楽しさを覚えるとはまってしまう（酒、煙草、賭け事と同様の依存性）

また、いつでもどこでも使用することが出来るため、スマホの使用が習慣になってしまう。

スマホ依存は直すべきなのだろうか

スマホ依存によって、心の健康が保てなくなったり、生きていく上で必要な力（創造力、想像力など）が身につかなくなってしまうたり、娯楽などに集中するあまり他のことができなくなってしまう。そのため、スマホ依存症は直すべきである。

スマホ依存症の人の反論

便利なら使いたい、個人の自由、依存症であることの基準がないので判断が出来ない。

3. 改善する意思

依存症によって引き起こされる問題を考えたとき「依存症は直すべき」という意見になったが、個人の自由ではないか、という意見の対立が起こった。

双方の意見をくみ取れる中間点を見つけると解決するとすると、解決策として

- ・自分で気づいてもらう
- ・ほかにやりたいことを見つける

という 2 点が上がった。後者は抽象的なので、前者と気づいている方への解決策を模索する方針になった。改善する意思がある人は意思を行動に移す方法を、意思のない人意思を持ってもらう方法を考える必要があるため、改善する意思の有無によって、解決策が異なる。

◆自分で気づいてもらう

◇意志あり⇒なぜやめられないのか

① 目覚まし、動画を見ながら寝落ちするという習慣、電子マネー、連絡手段、音楽という習慣になっているため、長時間使用し、生活の一部になってるから。

② 極端な解決法が多いため、直すハードルが高いと思われる。

③ スマホは際限なく使用できるため、歯止めをかけるものがない。

という 3 本の柱から解決方法を考える。改善方法としては、

① アナログに戻すことで、生活の一部というところから切り離す。

② スマホの機能はアナログでも補えるところがあるため、ハードルをこまめに設定する。

③ 友人や自助によって、時間の制限を作る。

◇意思なし⇒自分で気づかせる方法を模索した。

なぜ気づかないのかは、

⇒① 将来、自分のことがどうでもいいから考えない。

② 今楽しければいい

③ スマホ依存症のリスクが理解できていない、知らない。

④ 人間関係に必要と考える。

⑤ 上には上がいる。

ということが挙げられた。そのため、

①②③⑤具体的な症例、統計などを使用して目に見えるもの示す、スマホ依存症の体験をし実際に健康被害を体感する、スマホ依存症のかたに症状を語ってもらうなどをもって危機感を感じてもらう。

④通気を切ったり、時間を決めるなどして距離を置く。一回離れることによって本当に必要かどうかを考える時間を作る。

⑤自分の問題なので回りは関係ない。

という策がとれるという結論に至った。

また、全体的に自分の状況を理解するという点では心理療法の一環であるカウンセリングを受けるというのも解決策の一つではないかという意見が上がった。

4. 長時間使用と精神的な依存の関係

スマホ依存の症例の中で主に「長時間使用」「精神的な依存」があることに触れ、どちらが要因となっているのかを議論したところ、長時間することでスマホを使用することの優先順位委が上がり、スマホ中心の生活になっていくことによって精神的に依存するという流れになっているので、利用時間を短縮することで精神的な依存は解消されるのではないかという意見になった。

スマホの利用時間を短縮する策としては、

- ・スマホでは受け身になることが多いため、運動や創作などの自発的な趣味を見つける。
- ・使用前にスマホを使用する時間と満足度の目標を定め、到達したらやるべきことをするところに戻ることを繰り返すにより、好循環を作る。自己肯定感を持てるようになる。
- ・使用する前に使わないことの意味を考える。

が上がった。

使用する前に使わないことの意味を考える、に関しては逆の視点であるスマホを使用することの意味を考えた。

依存していない人：効率化か趣味というどちらかの意味を持って、スマホというツールを使用している。

依存している人：習慣として無意識に使用しているため、意味を考えるプロセスがない。

⇒スマホを使う前に、使用することの意味・目的を考える時間を設ける。

方法としては、ホーム画面に注意書きをしておく、スマホを離れた場所においておく、スマホの電源を切るなどの使用前にアクションを置くという策が例に上がった。

5. 最後に

スマホ依存症の問題は、最終的には自分自身で解決することが必要となってしまふ。しかし、自分一人での解決は非常に困難であるため、周囲の環境づくりによるサポートが不可欠である。

また、スマホを使うこと自体は悪いことではなく、その使用頻度や善悪については個人の価値観が大きく異なるため非常に難しい問題である。

☆子ども議員の提言

自分たちでできること

1. SNS の利用の際に、互いを拘束しないように友人間で約束できるようにしたい。
2. スマホ依存の改善に他の人の協力をお願いする。
3. スマホ依存は、無意識の利用が多いので、スマホを使う目的を考えるようにする。
4. スクリーンタイム機能を活用して、長時間の利用には警告が出るようにする。
5. 自発的な趣味を見つける。

教育機関 へ

1. 学校において、スマホ依存症の怖さを知るために、講習を開いて知る機会がほしい。
2. 一対一でスマホ依存症をフォローする機会を確保してもらいたい。
3. スマホ依存症による健康被害を体験する機会を体験する機会を設けてほしい。

☆子ども議員の声

スマホ依存という議題は人の価値観や依存症の定義といったあいまいな部分が含まれるため、とても難しい議題だと思いました。しかし、そのなかでも大体の結論が出せたというのは良かったと思います。

(山下 暁大)

スマホ依存症の議論をしてみて、今まで抽象的に「自分はスマホ依存症ではない」「スマホ依存症は良くないことだ」という固定概念をもっていただけで、スマホ依存症のことについて理解できていなかったということに気がついた。スマホ依存症の人にも悩みや考えがあるということをもっと色々な人に知ってもらうための努力をしていきたい。また、今回の経験を踏まえて、日々様々な所に目を向けて案が得ていきたいと思った。

(真野 詞葉)

初めて8時間という長時間続く議論のファシリテーターを務めさせていただいたので、最終点に向うために、目的をもって3人称的な視点で常に考えることに苦労しました。しかし、話すということに重点をおいたことで多くの視点をもった意見が生まれたので充実した議論になったと思います。

(田附 優)

今回初めて8時間にも及ぶ議論を行い、一つのことを煮詰めていくことの大切さを実感しました。また、普段は生徒会の集まりに参加することが主だったため、議論を開始した直後はあまり議論になれていない人とどのように議論をしたら良いのか戸惑いがありましたが、少しずつ議論を重ねていくことで議論の流れができ、結果的に皆でひとつの結論を導くことができたので、とても貴重な経験になりました。

(西條 正寛)

一言で“スマホ依存症”といっても、依存症であるという自覚がない人、スマホ依存症を改善しようという意志がない人など様々いますが、スマホ依存症の人たちの立場に立って考えながら、それぞれがどのようにしてスマホへの依存度をどのように下げていくのか意見を出していきました。2日間にわたる議論を通して、中高生にとって身近で便利なスマホに自分たちがどう向き合っていくべきなのか考えることができたと思います。

(高橋 美樹)

身近でも意外と自覚がなく遠い存在のスマホ依存症について、依存症患者の立場を理解できたのはとても有意義でした。個人の自由と病気の治療というジレンマを抱えた難しい議題でしたが、分科会で知恵を絞り、意見を出し合い解決策や結論をまとめることが出来ました。現実と理想のギャップは社会のいたるところに存在していると思います。このギャップを埋めれるように考えることが、討論の意味であり、社会問題を考えるということなのだと思います。

(石田 庸)



子ども国会実行委員会